

元橋一之著「日はまた高く 産業競争力の再生」日本経済新聞出版社、2012 年 2 月 25 日刊を読む

サイエンス革命と新たな国家の成長モデル—データサイエンティストとは—

新しい時代の IT イノベーションを理解する上で重要なコンセプトとなりつつあるのが「ビッグデータ」である。ツイッターでやりとりされるデータ量は 1 日で 12 テラ (12 兆) バイトといわれている。このようにインターネット上では日々膨大なデータが生成され、蓄積されている。このウェブ上の情報に、車の運行状況や携帯電話による位置情報などのデータを付加して、新たなビジネスにつなげるトレンドが「ビッグデータ」である。

例えば、JR 東日本グループは駅にカメラが内蔵されたタッチパネル型の自動販売機を置いて利用者の性別、年齢などを識別して、おすすめ商品を表示させることで売り上げを伸ばしている。このシステムでは利用者の属性に加えて、天候、気温、時刻ごとに商品の売り上げ記録を蓄積し、そこから消費者の行動パターンを予測するモデルを構築している。

また、NTT ドコモは携帯電話の位置情報とインターネット上の情報を組み合わせて、近くのレストラン情報の提供や終電が近くなるとその情報をプッシュで送信するサービスを行っている。

このビッグデータは、情報技術を使うことで顧客の行動パターンを科学的に分析し、その上にビジネスモデルを組み立てるものである。サイエンス経済時代のビジネスイノベーションを理解する上で重要なコンセプトである。

ビッグデータに内在する潜在的な価値を現実のものとして引き出すために必要とされるのが、データサイエンティストと呼ばれる人材である。

ムーアの法則に見られるように IT ハードウェアに関しては目覚ましい技術的進展が見られる。その結果、分析を行うための情報システムのコストはどんどん低下している。また、データベースマネジメントや分析ツールの開発が進んでいる。このように IT システムのコモディティ化が進む中で、競争力の源泉となるのは、データから価値のある情報を引き出すことができる人材となる。

データサイエンティストは、企業においてデータ分析・活用を専門とする人材で、現在、「世界で最もセクシーな仕事」ともいわれている。自社の事業に関するビジネススキルや数理統計のスキル、そして IT に関するスキルも必要になる。ただし、IT についてはその専門家が存在し、ビジネスについては事業部門という現場がある。したがって、データサイエンティストは数理統計のスキルで両者の橋渡しをする人材と考えていい。

しかし、このような人材がすぐに育成されるわけではない。数理統計のスキルについては大学などの高等教育を通じて学べるが、具体的なビジネスモデルを想定した解析ができるようになるには、実際のプロジェクトに参加する、つまり OJT (On the Job Training) が必要となる。

そこで企業として、組織的にデータ活用を推進するためには、まずは経営トップがコミットし、データ解析のために一定のリソースを投入する必要がある。その上で、データ活用によって成果を上げた事例を社内で展開していき、データドリブンの経営を浸透させていくことが重要である。

P152 ~ 153

[コメント]

世界が「工業経済」から「サイエンス経済」に移行するにあたり最も求められるのは、「データサイエンティスト」である。このことを詳細に論じた元橋先生の本著は、MOT (技術経営) で学ぶ社会人学生の必読の書。歯を食いしばって読み切り、自分のものにしてほしい。

— 2014 年 2 月 5 日 林 明夫記 —